

会議記録

名 称	学校教育環境等整備検討委員会〔第1回〕	
開催年月日・開催場所	平成23年6月2日（木） 午後1時30分～午後2時45分 南丹市役所 2号棟 301会議室	
出席者名	委 員	(出席委員) 山口 満、原 清治、内藤 喜代子、高木 茂、梅垣 眞由美 松本 貞和、川勝 規弘、片山 義宏、末武 千鶴子 堀川 勝久、秦 伸好、片山 敏哉、佐藤 明美
	事務局及び 庁内PT委員	(事務局) 森教育長、大野教育次長、前田教育総務課長、西田学校教育課長、 市原社会教育課長、坂瀬総括指導主事、山口教育総務課長補佐、 寺田教育総務課長補佐、山田研究主事 (庁内PT委員等) 学校教育課（小南指導主事、下田指導主事、中村指導員、森指導員）
傍聴人	1名	
配布資料	資料1 「南丹市総合振興計画（概要版）」 資料2 「平成23年度南丹市教育指針」 資料3 プレゼン資料「南丹市の学校教育の現状について」 (参考資料) ・ 諮問書（写） ・ 検討委員会委員名簿	
議事の概要	1 開会行事 ① 委員紹介 ② 委員長・副委員長選出 (委員長：原 清治 委員、副委員長：内藤 喜代子 委員) ③ 事務局紹介 2 議題 (1) 挨拶並びに諮問依頼事項について（教育長（別記）） (2) 南丹市の学校教育の現状と課題について（事務局プレゼン） (3) 豊かな学びと育ちを促す校種間連携について 3 その他 ・ 事務局からの報告事項 第2回検討委員会の開催日時の確認 4 閉会挨拶	
会議の経過	別紙のとおり	

■教育長あいさつ並びに諮問依頼説明■

ご多用の中、本検討委員会第1回目の会議にご出席賜り、お礼を申し上げます。

本日、午前中には、豊かな学びと育ちを確かなものにするため、本市がめざす教育の在り方について長期的な視点でご検討いただく『南丹市教育の在り方懇話会』を発足させていただきました。

本日の新聞報道において、厚生労働省は2010年における日本の人口動態に関する統計調査を発表している。出生率は少し上向いたとの結果であるが、人口の減少はトータルで10万人を超え、現在、日本は人口減少社会に入っているとの分析をしている。

本市においても、この大きな流れの中にあり、人口減少社会は本市にも押し寄せている。この人口減少期社会は、現在の社会を維持しようとするれば、今まで以上に一人一人の存在と役割が大きくなる社会であると言える。日本全体が少子高齢化であると言われているが、少子化が進行するということは、社会にとって子どもたち一人一人がより大切でより大きな存在になっていくことであるとも言える。本市もその例外ではないと考えており、長期的な視点に立った見通しと確かなビジョンを持って、子どもたちの豊かな学びと育ちをより一層促し、たくましく生きる力を育む学校教育が、今、日本中で求められており、本市でも求められているものと考えている。

本市教育委員会としては、子どもたちの学びをより確かなものにするためのものとして、各学校が特色を持って、学校力・教育力を大きくしていく取組を進めており、その結果として、本市児童生徒の学力実態は、全国学力・学習状況調査からも、国・府平均かそれらをやや上回る状況にあり、その水準を確保する状況にあると考えている。

しかしながら、子どもたち一人一人に目を向けると、各校から、また校長会等を通じて上がってくる子どもの実態の一つとして、子どもたちの育ちにひ弱さを感じるという指摘がされている。

このため、本市教育委員会として、就学前の保育と義務教育9年間をしっかりとつなぎながら、子どもたちの育ちをより確かなものしていこうとする取組を進めている。今後、こうした取組について、この検討委員会の中でご意見を賜りたい。

とりわけ、本市の小学校教育と小学校における学校教育環境を、もう一度今日的に振り返りながら、これからの長期的な視点に立って課題の整理をしたいと考えている。

学校教育環境を3つの側面で捉えており、そのひとつは教育的観点から教育の内容や方法を、義務教育9年間と就学前を見据えて捉え直してみる視点。二つ目は、人的な教育環境という観点から、子どもたちの集団の規模、子どもたちの学びの基礎となる集団について、どのように考えていけば良いのかという集団の視点。そして、三つ目は、子どもたちの学びの場である物的な教育環境、学校の施設設備を安心・安全の視点でとらえる。この3つの視点から小学校教育環境を考えていくことができればと考えている。

(以下、諮問事項の内容を、別紙(「諮問書」)朗読により説明)

■事務局説明

南丹市の学校教育の現状について

- 意見交換・協議 [○：委員発言 →：事務局発言]
＝委員長から論議の進め方について提案後、意見交換に入る＝

(議題1) 豊かな学びと育ちを促す校種間連携について

〔実態の背景と地域の教育資源を生かした効果的な連携〕

- 南丹市がめざす教育を具現化する立場で、急速な少子化を背景にした子どもたちの学びと育ちをより豊かにする教育環境の在り方が最大の論点である。とりわけ、豊かな学びと育ちを促すための校種間における連携した取組は、学びと育ちの連続性という視点からも大きな論点であると考ええる。
- 市内の子どもたちの「積極性に欠ける」という側面には、丹波地域の地域性や歴史性を背景としているところがあると考ええる。古来から「辛抱強く粘り強いが主体性に欠ける」という丹波人気質があるということが言われてきた。
- 考え方の基礎として、学校・家庭・地域が一体となって「地域の子どもは地域で育てる」という考え方が大切である。
- 南丹市の地勢として、集落が離れて存在している。ここに閉鎖的な要素があるとするれば、子どもたちには「ふれあい」「みつめあう」機会をたくさん作り、明るさと広さを求めたい。
- 地域性の違いによって学校の雰囲気の違い、子どもたちの特徴も違う。この中で、交流のきっかけを作ることは、地域のつながりを含めて、子どもたちに広がりを生んでいくことになると感じる。
- 何かを媒体として連携していくことが、効果的な連携につながっていくと考える。それは、各校下の地域とのつながりの中で見出される地域の教育資源をいかに利用していくかであると考ええる。とりわけ、各校下には文化施設やそこで職務を執る職員を媒体としながら、また、これらを教育資源としながら工夫をしていくことが効果的な連携の在り様である。
- 地域と重ね合わせた上での学校間・校種間の連携でなければ、子どもたちの生活の基礎である地域を巻き込んだ連携にはならない。

〔学びと育ちの連続性を確保し、豊かな学びと育ちを促す校種間連携の充実・推進〕

- 本市における保幼小の連携は、旧町によっては、本市合併以前から取組まれている。京都府の「もうすぐ1年生活動」を取組のきっかけとし、保育所・幼稚園・小学校間で行ってきた。本年度までに、子ども同志の交流事業や教職員間の研修交流等を実施し、互いを知ることの大切さの確認や、互いの良さや違いを知ることの大切さを確認できたことは成果であったと思う。この間、幼稚園分園の統合ということがあったが、振り返ると、この連携の取組の中で得た成果の大切さを追認できる。

- 幼稚園児の小学校への半日体験入学の取組を実施した際、この日を境に、迎える側の児童に、年下の子どもの面倒を見るというようなたくましさへと変化が見られるようになった。このことがより計画的な連携事業の推進に繋がる。
- 遊びを中心に据えて育ちを促す保育所・幼稚園文化と、教科を中心に据えた学びを促す小学校文化の段差が問題となりやすい。これの解消には柔軟に、保育所・幼稚園・小学校の教員の交流や、具体的な教育内容について検討すべきである。
- 本市では、旧4町の中学校ブロック毎に、それぞれの実践研究テーマを設定して、小中連携を実践してきている。実践内容例としては、小中の段差という課題に対する取組である。円滑な接続を図るには、授業力の向上を中心とする教師力の向上が不可欠であることから、人材育成の視点からの授業研究会の実施をした。
 具体的には、研究に付する教科を決め、小学校から中学校への円滑な接続に資するために教科指導の在り方を研究する実践が行われている。併せて、小・中学校間で、子どもたちの学力実態についての協議交流を早い時期に行い、その課題を明確にして、授業につなげていくことも大切な視点である。
- 中学校へ入学してくる児童の様子を、中学校の教職員が事前に知っておくと同時に、中学校の様子や入学までに付けてもらいたい力などについて小学校の教職員が事前に知っておくことが大切であるという観点から、互いに忌憚のない意見を言い合える雰囲気留意して、中学校ブロック毎の取組を今後ともより一層重視する必要がある。
- 校種間連携は、組織的・計画的に進めていくことが肝心である。そういう意味では、本市においては、年度初めに共通の実践テーマを定めて、学校間の連携を図る中で計画的に実践を行っているということは最良であると思う。併せて、子どもの交流だけでなく、教職員間の交流もなされていることも大変いい体制にあると感じる。今後は、子どもたちの積極性・主体性の課題に焦点を当てた改善策が必要となる。

◆◇まとめとして◆◇

〔少子化進行の中での校種間連携の促進と課題解決に向けた仕組づくりを〕

- 少子化が進む中であって、様々な校種間連携が組織的・計画的に取組まれている。更に効果的な取組を進めるためにどうあるべきかが課題であると感じた。これを解決するキーワードが「地域の教育資源の活用」であり、これを通じた「子どもたちの力強い育ち」に向けた工夫ある取組であると感じる。
- 少子化に対処していくための結論を導くにあたっては、数や規模だけで語るのではなく、教育的な着地点を見出す必要がある。そのキーワードは、「地域の資源を巻き込んだ連携」の在り方や、「小小の連携」「中中の連携」の議論、「人の連携」であると考え。

このような連携の課題を乗り越えることにより、教育上の課題の解決に向けた仕組みを作っていくことに繋がると考える。

3南教総第248号
平成23年6月2日

学校教育環境整備等検討委員会
委員長 原 清治 様

南丹市教育委員会
教育長 森 榮一

諮 問 書

下記に掲げる事項について、別紙理由を添えて諮問いたします。

記

豊かな学びと育ちを促し、たくましく生きる力を育む

小学校の教育環境の在り方について

〔理由〕

すべての子どもたちが夢や希望をもってたくましく生き抜き、自己実現を図ることのできる資質や能力を培うことは、未来社会の担い手を育む上でも極めて重要なことでもあります。

本市においては、家庭における育みとともに、学校や地域社会における教育的なかかわりやふれあいを通して、今日求められている「たくましく生きる力」の育みをめざしているところです。

とりわけ、組織的・計画的・系統的な教育を行う学校においては、一人一人の子どもたちの豊かな学びと育ちをめざし、切磋琢磨しながら「たくましく生きる力」を育くむための様々な取組を推進してきております。特に平成 20 年度からは、中学校ブロックを単位として、円滑な接続を図ることで学びの段差を小さくする保幼小中連携の取組をしてきております。また、平成 22 年度からは京都府教育委員会の「もうすぐ 1 年生体験入学推進事業」を試行的に導入し、就学前教育と小学校教育の円滑な接続を図るとともに、同じ中学校に進学する小学校間の交流を深める取組も進めてきております。

しかしながら、人口減少期に入ったと言われるわが国において、子どもたちを取り巻く社会環境は激しく変化しており、少子高齢化や情報化の進展、ライフスタイルの変化による家庭環境の多様化、地域の教育力の変化など、子どもたちの将来を見据える上で見過ごすことのできない状況が生じてきております。

特に、本市の子どもたちの豊かな学びと育ちを促すに相応しい南丹市におけるこれからの学校教育の在り方を考える時、その基礎となる学校教育環境に関する教育的な観点からの検討、とりわけ、少子化の影響をいち早く受けている小学校における教育環境の検討は、喫緊の課題であると考えております。

このような状況を踏まえ、子どもたちの豊かな学びと育ちを促し一人一人にたくましく生きる力を育むため、次の事項に関して諮問をいたします。

1 検討事項

豊かな学びと育ちを促し、たくましく生きる力を育む小学校の教育環境の在り方について

- (1) 校種間連携の視点から
- (2) 学びと育ちを促す人的環境としての「集団」の視点から
- (3) 学びと育ちを促す物的環境の視点から

2 答申期限

平成 24 年 2 月末日